Musubime works for the better society

Vol.001 2017 年 6 月出発号

むすびめ通信

エペソ 4:16

湯本沙友里 ニュースレター

お祈りと暖かい励ましに、心より感謝いたします。
アフリカのエチオピアでの働きに関わることに導かれ、2017 年 6 月に渡航することが決まりました。まずは現地を調査し 11 月に帰国したのち、今後の具体的な計画を立てていく予定です。ここまでの経緯をご報告したいと思います。

エチオピア渡航に至るまでの導き

「何のために生きるのか、誰のために生きるのか。」
約 4 年前、初めてエチオピアとケニアを訪問していた私は、ストリートチルドレンと呼ばれる社会の底辺で虐げられながらも懸命に生きようとするこどもたち、また、貧しい人々の姿を目の当たりにし、私自身の人生に与えられた目的について祈り考えずにはいられませんでした。

エチオピアの首都アジスアベバには、約 10 万人の路上生活者がいるといわれています。

イエスキリストを信じてからの私は「居場所をなくし苦しんでいる人」、特に家族の問題で苦しむ若い世代と関わっていきたいという思いが与えられていました。孤独社会と呼ばれる日本では、家があっても心のよりどころとなる「居場所」を失ったこどもや若者がいることを、自身の経験からも知っていたからです。今私が遣わされている場所で何ができるのか考え、「聞き屋ボランティア」という道行く人の話を聞く活動を始めたり、東日本大震災後の東北で活動している仲間たちを訪ねて現地での働きに参加したりなど、自分にできる小さな活動を行っていました。

FVI メンバーとの東北訪問。「聞き屋」の看板を持って、仮設住宅へ。

私は 2010 年から「声なき者の友」の輪（FVI*）というキリスト教 NGO に Web デザイナーとして関わり続けていますが、FVI のパートナー団体の一つがエチオピアにあり、そこで行われているストリートチルドレンの自立支援に対する働きに、特に関心がありました。その団体の創設者たちはこどもの頃から教会学校に通い、イエスキリストの生き方を学んでいたそうです。イエスは神でありながら、貧しい人や弱い立場の人たちの元へ自ら出向き、仕える生き方をされました。「もし、自分たちが本当にこのお方を信じるのなら、同じような生き方がしたい。自分たちの国には貧困という問題がある、海外からの助けだけに頼るのでなく、自分たちの問題として関わりたい」そう願うようになっていったそうです。10 代後半に成長した彼らは、仲間内で持っていたお金を集め、その額はわずか 2 ドルほどだったそうですが、バナナを買い、路上生活をしている子どもたちの元へ行き、配り歩きました。
その活動が 20 年近く経過し、現在は身寄りのない子どもたちが暮らす寄宿舎、小学校、職業訓練校を運営するまでに実を結びました。さらに、助けられたこどもたちが成長して青年になり、次の世代を助けている話も聞きました。

貧しい地域に暮らすこどもたちのために開かれた小学校の開校式

私は彼らの働きを知った時に「日本人である私こそが、彼らから学ぶ必要がある」と強く思わされました。日本は物質的には豊かですが、多くの問題も抱えています。それらすべてを解決する力はもっていなくても、同じイエスを信じるものとして私にもできる何かがあると信じていたからです。ほとんど何もないような状況であっても希望を捨てず行動を起こし続けたこと、救われた次世代へと引き継がれていることを学ぶため、エチオピア渡航を決意しました。

現地では主に、ストリートチルドレンと関わる活動を行いました。夜の街へ出ていき、こどもたちと話をして食事を提供します。家族の事、抱えている問題、将来どうしていきたいかなど、ひとり一人とじっくり話をし、必要があれば支援へと繋げていきます。また、児童労働や売春の問題解決の方法として開講している小学校や、新しい技術を身に着けるための職業訓練校でのトレーニングなどにも関わりました。次世代リーダーたちの主体性と希望ある取組み、将来への可能性に強く感銘を受けました。同時に、従来型の支援の仕組みには限界があることや抱えている問題も知りました。

過酷な労働を強いられていた女の子達は、寄宿舎で共同生活をしながら、新しい仕事の技術を身に付けるために職業訓練校に通います。

元ストリートチルドレンだった助けられた若者が、自分と同じ思いで苦しむ子どもたちを引き取り、自らの収入で養い育てています。

このような経験を得て帰国した私に対して、主はこれから何をすることを望んでおられるのか、今後必要になってくる働きは何かを祈り求め続ける中で、示されたことが２つありました。エチオピアの貧しい女性たちに雇用を生み出していくことと、家庭の回復に関わることでした。社会進出が不利な状況にある女性が、社会的に自立していくことで子どもを責任もって養い育てていくことができるように、そして貧しい人々の抱える精神面での問題は、健全な家庭という共同体の中で育まれる必要があると思わされたからです。家庭とは血の繋がり以上に、神に結びあわされた人々が共に生活する場であることが大切だと思います。人は家庭の中で愛を知り、自分を知り、他者へ目を向けられるようになり、家族の支えによって外で努力することができる、すべての人の営み、生きる活動の原点です。それが崩壊している今、自分も他者も愛せず、社会との繋がりをうまくつくれずに苦しむ人が大勢いるのではないかと思わされました。

日本とエチオピア、二か国への思いが与えられ、とても悩みました。出発前は、帰国後は日本で働きを担うことを望んでいました。しかしエチオピアに対する思いが消えずに強くなっていくこと、エチオピアで過ごしたことは大変であった同時に、私にとって生きている喜びを感じられる幸せな経験でもあったことが深く心に刻まれていました。
しかし、もし将来的に海外での働きに関わるのであれば、成長すべき課題として、日本でローカルビジネスを生み出すことや、キリスト者が仕事を通して社会で仕えることを学びたいと思いました。さらに、エチオピアに対する導きへの確信をゆっくり知っていこうと、３年間は日本に居ることを決意しました。

そんな中、思ってもみなかった名古屋へと、仕事を通して導かれ、私の想像を遥かに超えた恵が与えられてきたことは不思議で仕方ありません。良い出会いや学び、祈りの中での導き、周りの状況など様々なことが重なり、エチオピアへの思いが時間をかけて確かなものになっていき、今回の決断に至ります。

私は今後の働きをエチオピアの未来を良くしたいと願う現地の方々と共に担いたいと願っていますので、今回の渡航では主に FVI のパートナー団体である Harvest Ethiopia の働きに同行させてもらい、大きく２つの働きに関わる予定です。
一つは大学生に聖書の価値観をコーチングする、日本でいう KGK のような働きです。人のために命をかけたイエスが教えた隣人愛の理念と実践を分かち合う研修会を行い、学生に関わるスタッフが、「エチオピアの未来を「真実と隣人愛で満ちる社会」に向けて構築するのは君たちが身につけた生き方なんだ」と励まし続けています。FVI は 2015 年からこのチームを支援していますので、詳しい報告はウェブサイト (karashi.net) をご覧ください。愛の実践を自身の生き方として身に付けた、エチオピア社会の様々な分野に関わっていく学生たちと関係を築き協力し合いながら、働きを生み出すことを想像するとワクワクしてきます。

もう一つは、ビジネスを通して社会の問題を解決する人々のネットワークへの参加です。
いずれも、エチオピアの人々が主体として行われている取組みですので、私は彼らから学まさせていただきつつ、私にできる働きと視点を用いていただきながら関わっていきたいと願っています。

良くも悪くも、「自分の思いや願望」を強く持ちすぎる私は、したいと思うことを書き綴れはキリがないほど出てきます。しかし何より大切なのは主の導きを求めて、御声に従っていくことだと教えられてきました。大切なことを選び取る知恵と冷静さが与えられ、それを担っていけるよう祈り歩みつづけたいと願っています。

これまで、様々な方々との関係、支えや励ましにより、ここまで準備をしてくることができました。不確かな歩みへ賛同し激励してくださった方、愛を持ってご教示くださった方、陰ながら応援しお祈りくださった方、助けてくださった方など、お返しすることができないほどの沢山の祝福を与えていただき、思い返す度に胸が熱くなります。精一杯今後の働きへと繋げていけるよう、努めて行く所存です。
この場をかりて、心より感謝申し上げます。

渡航スケジュール

日程：2017 年 6 月 18 日―11 月 3 日
訪問地：エチオピアのアジスアベバ（拠点）
ケニア、ルワンダ

ご案内

■活動報告用ウェブページ

http://karashi.net/ethiopia

2013 年～ 2014 年のアフリカ滞在記もご覧いただけます。

■「声なき者の友」の輪ウェブサイト
（FVI...Friends with the Voiceless International）

http://karashi.net

【共に喜ぶ世界】で検索

■ホームページ制作事業「むすびめワークス」

https://www.musubime-works.com/

わたしは、エチオピアでの働きをしながら、フリーランスのウェブデザイナーとしての仕事を継続しています。
主に、教会や NPO、NGO、アフリカと日本を繋ぐ起業家のホームページ作りを行っています。

プロフィール

湯本 沙友里 Sayuri Yumoto

1986 年生まれ。野菜のおいしい茨城県出身。スポーツ、ドライブ、旅が好き。子どもの頃から野生動物と大自然が好きで、アフリカに憧れを抱く。動物看護師として動物病院での勤務や、農業関連会社で営業の仕事などを経験。FVI に関わりながら、聞き屋ボランティアや震災後の東北を訪問し、エチオピアとケニアを訪問。帰国後は名古屋で、掃除代行・片付けサービスを提供するクリスチャン企業で修行。この経験は実践を伴う弟子訓練だったと思っている。フリーランスのウェブデザイナーを継続しつつ、新しい国際協力の形を築くために、再びエチオピアを訪問する。

好きな名古屋メシ BEST3 !!
1. 麩まんじゅう
2. 台湾まぜそば
3. ひつまぶし

番外：炭焼きハンバーグ 爽やか

祈りの課題

・いつも主のみ声に耳を傾け、計画を立てていけるように、従って歩めるように。
・主を求め生きる方々との良い出会いがあるように。FVI のパートナー団体ハーベストのデメラシュ氏や関わる人々と、今後に向けての良い関係を築きながら働きを共に担っていけるように。
・自己管理に気を付けて、2 度目だからと甘く見ずに気持ちを引き締めながら行動できるよう、危険に巻き込まれないように。
・日本にいる家族のため

連絡先

Email : sayuri@karashi.net
skype ID : sayu-joy

支援のための献金方法

「声なき者の友」の輪 Friends with the voiceless International（FVI）」の働きのために、お祈り、ご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ でご覧いただけます。
経済的支援をもってご協力くださる方はお手数ですが以下の口座にお振込みください。
ご支援を心より感謝いたします。

ゆうちょ振替口座　口座番号：00180-0-300201
名義：FVI
湯本支援は通信欄に、「湯本指定」とご記入ください。

会計報告は FVI の年次報告をもって代えさせていただきます。
過去の報告をホームページよりご覧いただけます。

世代を超えた夢のストーリー：エチオピア　第２段階（2016 ～ 18 年）

次世代に隣人愛を広める祈りへの応答

「声なき者の友」の輪がエチオピアで理念を共有するハーベスト・エチオピアの代表デメラシュさんと協力を始めて６年。
20 年近く前、デメラシュさんが助言をしたことがきっかけで、仲間と２ドルを出し合って手に入れたバナナで、ストリートチルドレンの支援を始めたギザチュウさんを紹介してもらって６年間、協力してきました。今は、大きな現地 NGO に成長しています。

昨年 10 月、デメラシュさんから私たちに緊急のメールが届きました。「20 年来、『国に広がる真の変革』を祈り願ってきました。この祈りに大きく近づく機会が与えられたので、今まで協力してくださった日本のあなたたちにぜひ、力になってほしいのです。」と。それは、今まで、デメラシュさんが何人もの若者たちに影響を与えて始まった種まきプロジェクトの「隣人愛による変革～夢のストーリー」のような考えと実践が、より多くの次世代の若者に伝えられ、エチオピア全国に広がる可能性がある機会でした。

エチオピアでは近年、大学生が著しい増加を遂げています。その大学生たちのサポート・グループ・スタッフに対して、人のために命をかけたイエスが教えた隣人愛の理念と実践を分かち合う研修会を行っていくものでした。 学生に関わるスタッフが「エチオピアの未来を『真実と隣人愛で満ちる社会』に向けて構築するのは、君たちが身につけた生き方なんだ。」と励まし、経験を分かち合うことを想像するとゾクゾクしてきます。昨年 10 月、初めてのスタッフ研修を「からし種」を蒔く機会として日本から支援しました。
２か月後、再び、デメラシュさんから連絡がきました。「先日の研修会はとても好評でした。学生サポート・グループ代表から『ぜひ、学生やスタッフのために定期的な研修会を開催し、合わせて私たちの研修担当者を同行して育成してほしい』と正式に依頼されたのです。」と喜びの報告をしてくれました。

「エチオピア社会の様々な分野に関わっていく学生が、隣人愛実践を自分の生き方として身につけたら、未来の社会には腐敗でなく正義が、妬みや憎しみでなく愛が広がると信じています。」
祈りが答えられ、『夢のストーリー』が広がるときが到来したのです。 こうして 2016 年、「声なき者の友」の輪として、ハーベスト・エチオピアのデメラシュさんと全国学生サポート・グループへの「種まき」コラボが始まりました。

2016 年のエチオピア

エチオピアは 30 年以上前の大飢饉で、100 万人ともいわれる犠牲者を出した国です。20 世後半、「極貧の国」の一つとして数えられてきた国でした。
この 10 年、エチオピアの経済成長率は年平均 10％に及んでいます。2016 年の首都アジスアベバでは、高層ビル・マンションが次々に建設され、街は郊外へと膨張し、2015 年末から市内に電車も通るようになりました。
さらに、2016 年 10 月には、主に中国からの投資で北の隣国ジブチまでの 750 キロ、アフリカ初の長距離の電化鉄道が敷設され、10 時間で結ぶという、人と物資の新しい輸送経路が開通しました。人や物の移動が、格段にスピードアップする新しい時代が進んでいました。
その一方、通りの裏や街はずれにはスラムが散在し、世界を覆う「格差」がエチオピア社会にも浸透していることを感じさせられます。

デメラシュ氏と学生サポートグループの研修担当者

首このエチオピアで、今年から「学生倍増」という政府の５か年計画が始まりました。現在、48 万人の学生を５年間で 100 万人にしようとするものです。特に力を入れるのが理科系の増強で、70％の学生を理科系で育成する計画だそうです。
「富をもたらし、国を発展させるのは科学と技術。」20 世後半の世界の国々の成功例を吟味し、高等教育では技術、特に IT などの先進技術を身につけさせ、国の経済力を高めたいという考え方が底辺にあるようでした。
「技術力を基にした経済力で、国が発展して豊かになれば、国民はみな幸福になるはず」と経済成長が急速に進む今のエチオピア。その中で、考えるべきことがまだあるのではないかという提案を投げかけているのが、デメラシュさんとその活動に応答した学生サポート・グループの人々のように思います。

彼らが投げかける提案の核は「人とは、技術とスキルを身につけて経済成長に貢献するだけではなく、人との関係、そして正義、公正などの視点を持ち、それを生きるという人格に反映される社会性や、広い知識を得て深い洞察をするという教養・知性を身につけて、すべての側面で総合的に成長するとき、社会に真の貢献ができる」というものです。

この時代に、途上国と言われてきたエチオピアで「真実の人の育成」と格闘を始めたエチオピアの人々に協力する道が開かれたことを思わされます。

エチオピアで、これからの学生たちが体得すべき資質

デメラシュさんに協力要請した学生サポート・グループが、これからのエチオピア社会のために学生たちが体得すべきだと確信したことが、「社会の弱い立場にいる『声なき者』たちをいつも視野に入れて、どの専門分野からも貢献し、自ら隣人愛を生きていくこと」というものでした。

エチオピア社会では、数％に過ぎない大卒は人々からエリート層とみられ、多くの場合、高給を約束される職種や役職に就きます。卒業生たちが、自らの手を差し伸べて最も弱い人々に関わることを当たり前に生き、弱い人々が支えられるような社会構築に貢献するなら、エチオピアの未来の社会はどれほど輝くことになるでしょうか。そのようなビジョンを真剣に追い求めていました。
豊富な知識、技術、物事を深く理解する力などを最高レベルで身につける能力を与えられた大学生たちに最も養ってほしいこと。それは、人々に仕え命まで差し出したかた、イエスの姿に日々の歩みで倣ってほしいというものです。自ら隣人愛を実践し、「声なき者」が支えられる社会構築に自分の専門、職種で貢献をしていくような次世代を育てようとする熱意が満ちていました。

そのために、2016 年の春からデメレシュさん（写真左）は、学生サポート・グループの研修担当のエドッサさん（右）と研修を共にし、毎月メンタリングの時間を過ごしています。

「声なき者」を生まない社会づくりへの協力～「夢のストーリー」の広がりへ

20 世紀の先進国が見落としていた高等教育での資質、それは「生き方」ではないかと思わされます。最も弱い人々に目を向けて、知識を活用し、正義と公正を自分の生き方とする。そのことに気づき始め、知識と生き方のバランスを兼ね備えた次世代育成を目指すエチオピアの人々に、日本から新たな協力を始めることにしたのです。

世界第二位の経済大国になった中国が、エチオピアのみならず、アフリカ全域で社会インフラや高層建物の建設という「ハコモノ」への資金とスキルの投資を次々に行うなかで、戦後 70 年の経済発展を遂げた日本の私たちは、70 年を振り返り、「社会の発展と人の育成の関係」について、何を学んできたのかを問い直す機会をこの協力を通して与えられているように思います。

「人に仕える生き方」を身につける大学卒業生たちがエチオピア社会に散らばっていくとき、エチオピア社会はどのように変わっていくのでしょうか。ワクワクするような夢の実現を思います。
次世代育成。大切なテーマに協力することで、日本の皆さまと共に様々なことを考えていけたらと願っています。